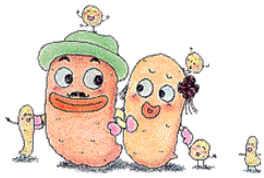
ゆ　ー　と　ぴ　や　　2022年1月1日　第53号

湯戸飛夜いけいけだより



発行　西徳山まちづくりの会

記事：

・新年明けまして
　おめでとう
　　ございます

・連載小説
　『男でござる　新説天野屋利兵衛』
　第４回

・戸田駅前ﾋﾞｱｶﾞｰﾃﾞﾝ
「『まちづくり納涼祭』を開店しました」

・戸田駅前ﾋﾞｱｶﾞｰﾃﾞﾝ
「『秋覚祭』を開店しました」

・今後の行事予定

会員募集中
あなたも「西徳山まちづくりの会」で一緒に活動しませんか。会では、常時、会員を募集しています。

E-mail：
nishitokuyamamatizukurinokai@gmail.com

新年明けまして
おめでとうございます

令和４年の新春を迎え、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

私たち西徳山まちづくりの会では、まちづくりの基本は人と人のつながりと考えており、人が集い、語り合い、笑い合い、お互いの良さを認め合い、力を合わせて住み良い地域を作っていくことがまちづくりだと考えています。私たちはまちづくりの取り組みとして、人と人が集う場の提供としての「戸田駅前ビアガーデン」と環境美化としての「戸田駅前花壇での花育て」を行っています。

新型コロナウィルス感染防止のため、ほとんどのイベントが中止を余儀なくされている中、私たちは、花育てをメインに取り組み、昨年の周南市花壇コンクールで、一昨年の特別賞に続き、優秀賞を頂くことができました。これも「戸田駅を花の駅にしよう」を合言葉に毎月第２、第４土曜日の１６時から戸田駅前花壇のお世話、広場周辺の草取りなどの作業を続けてきた成果だと喜んでおります。

自分たちでできることは自分たちで行い、行政にしかできないことは積極的に働きかけていく。『自分たちの住むまちは自分たちでつくっていく』ものです。まちづくりに興味のある方の参加をお待ちしています。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

西徳山まちづくりの会

連載小説

『男でござる　新説天野屋利兵衛』

第四回

文　城山　耕作

河村瑞賢

時は、もうすぐ元禄の御代を迎えようとしている。

徳山藩の家老であった神村将監は、藩主の後継問題で御家断絶を言い渡され、愛する萬の住む四郎谷に移り住んだ。萬との間に生まれた喜兵衛も十二歳になっていた。

四郎谷での神村は、まるで水を得た魚のようであった。朝日と共に起きて、日中は、愛する萬と子の喜兵衛と一緒に野良仕事に励む。日暮れには家に帰り、質素ではあるが、萬がこしらえた夕ご飯を食べる。

雨がふれば、書物を読む。喜兵衛も萬のしつけがよいのか論語などのかなり骨のある書物を読めるようになっている。萬は専ら俳諧の書物に夢中である。

神村は家老の時に集めた雑多な書物をたくさん持っていたのである。農業・土木・製塩などの産業の本から財政・商業などである。もちろん武士の基本である四書五経から兵法の本は言うに及ばずである。

ああ、こんなにも素晴らしい生活があったのか。海が見降ろせて、景色も言うことなしだ。ここで一生過ごそう。」神村は独り言ちるのであった。

親子３人が健やかに暮らせるならば、ほかに何がいるものか。喜兵衛も学問を好み、素直に育っている。このままの幸せがいつまでも続いてほしいものだ。」神村は心からそう思う。

里の人たちもみんな親切、気の良い人たちで、米や魚などを持って来てくれたりする。将監も野良仕事の合間に、村の子供たちに読み書きなどの手解きをしている。

子供たちは、どんどん吸収していく。そうするとどうだろうそれに触発されて親たちも学問への理解を示し、将監に教えを請いに来る。おそらく当時としては、四郎谷ほど学問への意識が高いところはなかったであろう。

こんな理想的な郷で、喜兵衛は少年期を過ごしたのであった。

ここで話の進行上、舞台を江戸に移さねばならない。それにしても主人公の喜兵衛、つまり後の天野屋利兵衛についてこれほど言及しない物語があるだろうか。今しばらくご辛抱を願いたい。そのうちアッと驚く大展開が待っているので、どうぞ読み続けていただきたい。

江戸は徳川家康が開府以来、大発展を遂げて世界の中でも有数な都市になっていた。幕府によるインフラの整備と、大名の江戸屋敷設置などで地方から江戸に人と物の集中が進んだのである。いわゆる成長と分配の好循環が江戸において行われた。

そんな江戸で抜群の商才を発揮した者がいた。それが河村七兵衛、後の瑞賢である。ずいけんと読む。河村瑞賢は伊勢の人で、江戸に出て、彼の持って生まれたアイデアを次々と実現させてそこそこの商人になっていた。

そんな江戸に明暦の大火が発災する。その火事は江戸の大半を焼き尽くすのである。

瑞賢の家屋敷も例外ではなかった。そんな時でもいつまでも落ち込んでいないのが大成する人物である。瑞賢は、有り金を懐に入れて木曾へ赴く。大火後の建築ラッシュを見込んでの木材の入手のためである。その目論見は見事に当たり、莫大な利益を手にすることになる。こうして彼は豪商へとなったのである。

瑞賢の商売は人が幸せになるために必要なものを扱っての商売であり、幕府も瑞賢の商いに大いに恩恵を受けていた。

その頃天領（幕府の領地）を東北各地にその多く持つ幕府は、天領で取れる年貢の米をいかに早くしかも効率よく江戸に運ぶ方法を考えていた。日本海側の山形の酒田からの米を江戸に運ぶには、舟運に限る。一挙に多くの米

を船に乗せて日本海を南下し、関門海峡を通り、瀬戸内海を東進する。天下の台所の大阪を経由して、太平洋に出て北上して江戸に到る。一見遠回りに見受けられるが、馬で陸路を運ぶよりよほど効率的なのである。

これを西廻り航路という。一方、阿武隈川の河口から太平洋を南下して江戸に到る航路を東回り航路という。どちらも幕府が河村瑞賢に依頼して、開かれた。

航路を開設ということは、実に政治的な作業であった。西廻り航路沿岸の各藩に船の運航上の安全を依頼したり、風待ちで寄港するときは運上（入港税）を免除するように頼んだり、航海の難所では夜航海に備え灯台を設置した。灯台といっても遠くから見える焚火のようなものである。

河村瑞賢は明暦の大火後、木曽檜を江戸に運んだ経験から、見事に幕府の要請に応え東回りと西廻りの両航路を開設したのであった。

当時の船は五百石積みであるとして、一度に千二百俵積める。このように米を満載した船が秋から冬の日本海を南下する。冬の日本海は実によく荒れる。

このような船が酒田に集まる十五万石の米を運ぶのだから、多くの船がこの西廻り航路を往来したのだろう。

米を満載した船は、米だけでなく各地の物産や文化も運んだに違いない。荒れる日本海を風待ちを繰り返しながら江戸へと向かい、帰りは江戸や上方の文化や各地の物産を寄港するところへ振り撒いていく。まさに流通革命を瑞賢は成し遂げたのである。

四郎谷もその風待ちの入江のひとつであった。萬の愛読する俳諧の書物も船が上方の文化を運んできたものである。

船乗りは当時水主（かこ）と言って海賊まがいのものとして恐れられていたが、西廻り航路ができてからはほとんどが幕府の用船であったので、上陸する乗組員たちも極めて紳士であった。

四郎谷も天気の好転を待つ帆船が多く停泊するときもあり、当然喜兵衛も船乗りたちの話を聞く機会もあったのである。

喜兵衛の決心（十）

何故酒田の港からはるばる日本海を南下して、関門海峡を回り、瀬戸内海を東進し、紀伊半島から太平洋を北上して江戸まで船を廻す西廻り航路が必要であったのか。それは最上川沿いに幕府の直轄地つまり天領があったからである。そこでできた米を迅速に江戸まで送る必要がある。江戸の人口はどんどん増え続けていて、経済の好循環が起こっている。今や京・大阪を追い抜いている。

米に限らずあらゆる物資が江戸に集まる。西廻り航路だけでなく、西日本の各地からの舟運も大阪・江戸へと物を運んでいくので、四郎谷の沖の周防灘は行きかう船で殷賑を極めたであろう。

ちなみに、当時の船は最大五百石積みとして、およそ千二百俵（一俵六〇キログラム）積むことができる。一船動かせば、莫大な収入になるのである。であるから、資本のある廻船問屋は大きな収益を上げることができたのである。このようにして元禄前の流通革命は起きた。いつの時代も必要が父なら不自由を母として、イノベーションは起きるのである。

徳山藩の四郎谷にも風待ちの北前船が立ち寄っていたというのは前にも述べた。当然江戸や大阪の話も喜兵衛の耳に入ってくる。河村瑞賢は豪商にして、社会に役立つ人物であるということも喜兵衛は聞いて知っていた。

「河村瑞賢のような人物になりたい。」喜兵衛の胸には何時しか大きな塊のようなものが育っていたのである。

夢を実現するにはどうすればいいだろう。Dreams come true. まずは、船の船頭に頼んで、水主として働きながら江戸大阪をこの目で見なくてはならない。そうして商いを学ぼう。」

（以下次号）

戸田駅前ビアガーデン
「まちづくり納涼祭」を開店しました

令和３年７月２４日（土）正午から、戸田駅前ビアガーデン「まちづくり納涼祭」を開店しました。参加者は、会員１０人でした。

メニューは冷たい生ビールに海鮮ＢＢＱで、サザエ、デビラカレイ、鮎、イカ、玉ねぎ、ズッキーニなどを焼きました。晴天の暑い日でしたが東屋の日陰は少し風もあり気持ちよく、炭火で焼いた新鮮食材は大変美味しく、口福です。マスク会食で不自由を感じながらも、久々の集まりで、楽しいひと時を過ごしました。

戸田駅前ビアガーデン
「秋覚祭（しゅうかくさい）」を開店しました

令和３年１１月６日（土）正午から戸田駅前ビアガーデン「秋覚祭（しゅうかくさい）」を参加者７人で開店しました。

秋刀魚（さんま）、サザエ、イカ、河豚、カマスなど豊富な海の幸と新米むすび、さつまいもなどの山の幸、新鮮な秋の味覚を存分に愉しみ、冷たいビールで喉を潤おしながら、至福のひと時を満喫しました。今年も

秋刀魚は漁獲量が少なく高値ですが、大きくてしっかり脂ののった刺身にできるほど新鮮な秋刀魚を炭火で焼き、その味を堪能しました。

今後の行事予定

戸田駅前広場周辺の清掃

毎月第２、第４土曜日の１６時から、戸田駅前広場の清掃と花壇の手入れを行っています。

お手伝いしていただける方、大歓迎です。

編集後記

過去は変えられないが、これから来るであろう未来は、努力ややり方によっては、今の自分を変えることができるかもしれない。人はそれを希望と呼んだりする。

あの時、不覚にも嫁にもらった古女房。もしもっと美人と結婚していたなら、俺の人生はどんなにすばらしいものだっただろう、と思ったりする。これは相手にも言えることで、もしもっとお金持ちと一緒になっていたなら、私の人生バラ色だったのにと、ひそかに心の中で呟いたりしてみる。

しかし、これはなかなかできないことであるが、今の境遇を肯定的にとらえてみる。「ああ、この女房がいたからこそ今の自分がある。妻にして本当に良かった。」「この人と一緒になってほんとうによかったわ。」などと思ってみよう。するとどうだろう。「あの時の結婚は間違いではなかったのだ。二人は運命的な出会いをした。誰が何と言おうと俺たち夫婦は固いきずなで結ばれている。」このようには思えないだろうか。ほら、過去は変えられた。なーんて思えたらいいのに。

まちづくりの会が手入れをしている戸田駅前花壇が、この程周南市の花壇コンクールで、優秀賞を受賞した。たとえそれが極めて同情的な表彰ではあっても、認められたといううれしさには変わりはない。私たちの活動は正しかったのだ。苦労したことや汗を流したことが喜びへと変わっていく。ほら過去は変えられた。

発行責任者
会　　長　　神本康雅
広報部長　　木曽裕子

西徳山まちづくりの会
ホームページ URL:
nishitokuyama.web.fc2.com